

バンコク日本人学校における日本語補習（小学部1・2年生対象）と実践

前バンコク日本人学校 教諭

大阪府和泉市立信太小学校 教諭 岡崎 祥和

キーワード：在外教育施設, バンコク, 日本語補習 (小学部1・2年生対象), 二重国籍

1. はじめに

バンコク日本人学校で、縁あって教鞭をとる機会をいただいた。私は小学部2年生の担任ということで、日本語補習の主任をさせていただいた。日本語補習受講対象児童は、二重国籍といわれる両親のどちらかが外国籍にルーツをもつ児童である。日本語補習はそのような児童の大半が家庭での日常会話をタイ語などの言語で行うため、日本語での日常会話に遅れが見られる。そのため児童の学力保障の観点から、放課後週1回程度行うものである。その指導内容と概略を紹介したい。

2. バンコク日本人学校における日本語補習の実態

(1) クラス編成について

指導を効果的に行うために児童の日本語能力に応じたクラス編成を行った。編成に当たっての日本語のレベルは以下の通りである。

- Aクラス：日常会話はほとんどできるが、保護者の希望により、日本語の語彙を増やすことに主眼をおいて指導するクラス。
- Bクラス：日常会話はほとんどできるが、助詞や時制などの理解がまだ十分でなく、正確な日本語の指導を必要とするクラス。
- Cクラス：日本語での意志疎通はできるが、発音がまだ明瞭でなく、日本語での会話に若干の困難が伴う児童の指導に当たるクラス。
- Dクラス：日本語での意志疎通に困難が伴う児童の指導に当たるクラス。

1年生のクラスは基本的に担任が見ることができるよう配慮されている。2年生では1学期当初にレベルチェックを行い、5つのレベルに分けて授業を進めた。本来は4つのクラスに分けて授業を行うところだが、Cクラスの児童数が多かったこと、ややレベルの幅が広がったことからC1・C2の二つのクラスに分けて授業を行った。レベルチェックの内容は、書く、話す、聞く、音読、語彙の5つの観点について、自己紹介をしたり、国語の教科書の音読の新出漢字を考慮した文章を音読させたり、色やカタカナで書くものなどの言葉集めをしたりすることで行った。

レベルチェック後、2年部の教員が全員集まり、一人ひとりの児童についての協議をし、クラス分けを決めた。音楽専科の教員も合わせて12名の教員が指導に当たれたために、児童の人数が多いCのクラスを2つに分けた。それぞれのクラスを人数や児童の学習状態などを考慮し1～3人で担当し、役割として、T1が主に指導し、T2、3が学習内容や児童の様子などの状況を記録した。記録は児童の課題を把握すること、事後の指導の参考とすることを目的として行った。

学期ごとに日本語補習が必要でない児童はいないか、クラスのレベルにあっているかどうかといった共通理解をもつ時間を設定し、クラス編成を検討した。

(2) 指導について

各クラスとも、教科書『にほんごをまなぼう』を用いて、年間指導計画に基づき指導をした。ただこの教科書は第1学年の時から使っていることと児童の能力も多様なため、教科書だけの指導では十分ではない。そこでそれぞれのクラスで教科書以外の教材を使った指導が行われている。教科書以外の主な取り組みを紹介する。

① プリント学習

それぞれのクラスで児童の能力に応じたプリントを作成して学習を行った。語彙力や助詞、文法を身につけるために有効であった。毎回、グループごとに学習状態にあった独自のプリントを使って指導した。

② 体験的な活動

それぞれのクラスで教科書の内容に応じて行った。語彙を増やすためにゲーム形式で行ったり、実際に道具を使って体を動かしたりするため、子どもはとても意欲的に取り組んだ。

③ カードによる学習

カードやカルタの活用については、それぞれのクラスで工夫して行われた。カードを用いた活動を通して、普段使われていない言葉にも触れさせながら語彙が増えるように支援した。

④ 対話、文章表現による学習

どのクラスでも、児童の実際の生活から他の人へ伝えるためのいろいろな表現をさせる活動を行っていた。

⑤ 発音、発声練習

Dクラスは教科書の内容と平行して、発音、発声練習を行った。口の形だけでなく、舌の使い方や息の吹き方などに注意しながら、年間を通して継続して行った。継続的な練習をすることで、口を動かすことを意識的にできるようになり、五十音の発声ではほぼ明瞭になってきた。ただ音読や日常会話の中ではまだ不明瞭なことがあり、家庭でも意識して発声できるように保護者に協力をお願いした。

(3) 成果と課題

① 成果

- ・能力別にグループ編成したことで、クラス内での個人差が小さくなり学習内容を重点化した指導ができた。それぞれで児童の実態に応じた指導ができています。
- ・当該年度作成した年間計画に基づいて指導を行い、児童の実態や保護者の願いを考慮しつつ、年間計画に修正を加えながら指導することができた。
- ・普通の授業の中で活躍できない児童が、少人数で自分のレベルに応じたクラスということで意欲的に活動することができた。
- ・児童の興味関心に合った教材を用意することで、児童の意欲を高めることができ、できる喜び、わかる喜びを味わわせることができた。
- ・毎時間の児童の様子を記録することで、一人ひとりの学習の成果と課題が明確となり、児童の実態に適した次時以降の学習内容を設定することが可能となり、定着の積み上げにつながった。
- ・授業の流れの記録をとることや自作教材をファイリングすることで、指導内容や方法を次年度の参考資料としても残すことができた。

② 課題

- ・教科書『にほんごをまなぼう』をベースに教材化を図っているが、児童の実態を考慮し、さらに教材開発をし、年間指導計画を弾力的に活用していく必要がある。
- ・日本語を教育する上でのノウハウを教師自身をもっと身につける必要がある。これまでの研究の積み重ねで日本語補習を行っているが、担当者の研修の機会が少なく、専門的な知識をもった者が少ない。外部講師などを招いて、日本語教育についての研修をする必要がある。児童の実態は多様化してきており、少しでも対応できるようにしていく必要がある。
- ・1年生と2年生の学習の連携が今よりもっと必要である。1年生での学習をさらに発展できるような指導計画を立て、指導方法についても検討する必要がある。また2年生で日本語補習の学習が終了になるが、日本語での意思疎通に困難が伴う児童はいるので、その子どもたちの対応についても考えていかななくてはならない。



体験的な活動



カードによる学習